

櫻工

創刊号

1955

日本大学互科校友会

櫻 工 創 刊 号

1955年

= 目 次 =

会誌創刊之辞	佐賀 直光	1
自己の才能を見失うな	横地伊三郎	2
発刊の辞に代えて	古田重二良	2
若い人のこころ	木村 秀政	3
技術賛歌	鈴木 雅次	4
日本大学工学部創立の由來 (佐野先生を中心とした鼎談)		5
噺ノ藤田駿先生	池森 亀鶴	11

今後の新制大学育成と 校友会の在り方	松田勘次郎	12
動物と火事	塚本 幸一	13
鉄鋼材の被割注定数について	西 彰雄	15
反射型速度変調管に依る極超 短波の再生及び超再生増幅現象	石井 好雄	18
地方支部を至急つくれ	谷口 清治	23
空白の歴史	池森 亀鶴	24
低賃金、高賃金	白土 暁	25
ふるいわけについて	橋本 建次	26
定型と応用型	西 彰雄	28
教室だより		29
支部通信 群馬県支部		30
学術講演会報告		30
工学祭だより		32

会誌創刊之辞

会長 佐賀 直 光

工科校友会が生まれましてより六年余、此の間会員並に役員各位の熱心なる御盡力により会勢の基礎付けも漸次軌道に乗つて参りましたが、更に今回かねてより強く要望されてをつたえの校友会誌が、創刊されるに至りました事は皆様と共に極めて喜びにたえぬ処で御座います。

会は正しく六年前に創立されたので御座いましたが、当時は皆様御承知の通り終戦後の混乱期でありまして、交通通信、経済等々の諸情勢極めて悪く、従いまして会事業の推進運営も遅々たるもので御座いました。

廿五年に至り、貧弱ながら事務局を設置する事が出来ましてから、通信、連絡等も漸く円滑になり初め、不足不備ではありましたが、綜合名簿の編輯発行更に会ニュース等の発行をも出来る様になつたのであります。引き続き昨年度中には是非共会誌第一号の発行を致し度いものと、一同意気込んで居りましたが遂に叶はず誠に残念至極に存じてをりました。本年度に入りましてから亀井会誌委員長初め各委員の誠私的な御盡力により、甚しく窮屈な資金と不足勝ちな人手、時間等の悪条件にも係わらず、熱心な工夫研究を重ねられて発刊の運びに至りました事は、即ち会員諸兄の情熱の発露であり、会運進展に大なる歴史の一頁を加えるものと信じて止みません。

申す迄もなく校友会の存立する意義は、母校日本大学工科を中心と致しまして、校友、教授、学生の三者が充分な相互理解と、意志の疎通に勉めて、夫々の社会的発展の爲め密接不可分なる因縁をもつたの、母校の充実振興の爲めに外郭体として大きく盡す事にあると存じます。

従而、会誌の使命は之れが爲めに概めて重大でありまして、言はゞ会の血脉に価すると信ずるのであります。今後恐らくは此の会誌が会の発展を、即ち母校の発展、校友の発展を、絶えず大きく表現して行く事になると確信致します。「若きエンジニア」の此の血脉が、大きく静かに脈動して、不絶清新にして燃ゆる血潮が流れる如くあらん事を、深く心から期して止まぬ次で御座います。

尚末尾ながら紙上を通じ、全国津々浦々の親愛なる校友同志諸兄の、銜繁榮を慶祝致すと共に、御健斗を御祈りし御挨拶と致します。

工学祭だより

工学祭七日間にわたり開催

工学部祭前夜祭は二十九日午後三時本館前のドリームガーデンにおいて行われた。まず前夜祭副部長首藤英造君の開会の辭についで横地伊三郎工学部長、瀬谷浩一郎工学祭委員長のあいさつ、大山和夫前夜祭副委員長から“交通安全旬間中でお巡りもうるさいことだろうが多少の無礼講はかまわない”との行進に関する注意などがあつて三時半近く学部旗を先頭に街頭行進に移り二号館前一駿河台下一中央大学前一商学部一お茶の水駅を通過して五時半頃再びドリームガーデンへ歸つた。各科代表および小野竹之助補導課長による審査の結果、建築課の石山寺が第一位に賞、ファイアーストームを前に賞品を授与。NUTのジャズ演奏などがあつて七時散会した。

芸能祭は芸術祭と名づけて二十六日から三日間毎日午後五時三十分から共立講堂で盛大に開催、オ一日目は横地工学部長、佐賀工科校友会長瀬谷工学祭委員長のあいさつがあり全員で校歌を斉唱後演芸の部に入つた。

まず同学部演劇研の“たつのおとしご”は題材もよく、演技もうまく場内をわかせた。ついでソプラノ歌手伊藤京子さんの独唱、同学部女子合唱団の合唱、同学部楽団のバイオリン演奏の後全員で“若きエンヂニヤ”を斉唱八時五十分オ一日のプロを終了、二日目は工学部副委員長北村豊君のあいさつ、校歌斉唱について工学部一年の佐川君の見事な司会ぶりです八八研究会が“千鳥の曲”

“春の海”を奏し、続いてNUT軽音楽愛好会による演奏、久留島みどりさんの歌に場内はわきかえり八時五十分オ二日目を終了、オ三日目は謡曲研究会の素謡“紅葉狩” 独鼓“八鳥”“羽衣”などが出され場内に古典の空気をただよわせた。ついで同学部夜間高校の合唱、NUT軽音楽愛好会による演奏、同学部ハーモニカ愛好会のハーモニカ演奏、横河電機リードアンプリーがクラシック音楽をハーモニカで奏し前日につづき久保田敏夫さん（本学先輩）の指揮するラツキーパーオーケストラがジャズ音楽をアンコールにこたえて数曲よけいに演奏。

“若きエンヂニヤ”の楽団演奏を最後に八時五十分、三日間にわたる工学部芸術祭はここにめでたく終了した。またオ一回の文化発表会は三十日Y.M.C.A.で正午から開かれ、永田学長のあいさつの後、世界学生建築会議に出席した本学大学院の北野君の講演、本社主催の“日大ニュース”

上映、Y.M.C.A.の研究発表、講演、歴史“眞一の手紙”のシネプレヒコール（朗読劇）演劇研究会作の放送劇“平土産”とそのほか尺八、琴、謡曲“羽衣”などがありニソボン放送の“スピードクイズ”の公開録音は観客をわかせ、つづいてハワイアンバンドなどによる演奏、女子合唱団の合唱などがあつて閉会した。

展示会は三十日から一日まで三日間同学部で開かれ三日間延六万を超える観客に場内はごつた返した。各学科の各研究会が特色のある機械類などを展示、砂防河川研や、港湾研などは毎年台風になやまされているわが国だけに注目をひいた。また建築デザイン研の都市計画案、都立体育館のシェル構造の破壊試験、自動車研の展示、電力研の発電などに関するパノラマなどそれぞれの特徴を生かしており、工学部ならではの感があつた。ことに航空研の模型飛行機展示、鉄道車輛研の模型電気機関車の運輸のところには沢山のこどもたちがむらがり目を輝かせていた。

別棟にある大学院校舎でジェットエンジンが公開され、若きエンヂニヤが熱心に見入つた。薬学科の校舎でも興味ある薬品類を展示したが地階のこどもの理科実験室は場所が悪く集りが少なかったのは惜しまれた

こうして三日間神無一円に人気を呼んだ七日間にわたる学部祭は一日全プロをとどこおりなく終了、惜しまれつつ閉幕した。

あとがき

早く発刊しなければ、と焦つて居りましたが、具体的に話がまとまり原稿の依頼を始めたのが十月に入つてからの事でした。工学祭に発行出来る様にと急いだのですが、何分雑用も多く編集に専念出来ませんのと原稿の集りも悪く、発行は年を越してしまいました。全く編集当局の怠慢を重々御詫び申します。木村、鈴木、池森、松田の教授大先輩を始めとして多数の得難い玉稿を戴き本創刊號を飾る事が出来ました事を感謝して居ります。又佐野先生を煩はし

て本学工学部の創立当時の数々の興味深いお話しを伺う事が出来、学生に対する御教訓も得られた事は企画した編集当局の自慢してもよいものの一つではないでしょうか。然し紙面の都合上一部分を止むを得ず割愛しなければならなかつた事を甚だ残念に思います。尚池森先生の歌稿も同様に割愛させて頂きました。論文教室だより、等が全科に亘らなかつた事は残念でしたが次号からは全科を網羅して学園と校友との結びつきの一つにしたいと思います。御投稿を待ちます。校友方も何によらずど

しどし御投稿下さる様御願します。

桜 工 創刊号

昭和30年1月8日 印刷

昭和30年1月10日 発行

編集人 杉村俊一

発行人 高木政司

東京都北区中十条3/23

印刷所 ジャーナル社印刷所

電話(91)2124番

東京都千代田区神田駿河台1/8

発行所 日本大学工科校友会

電話東京(29)7711代表-9番

振替口座東京162710番